

[別紙2]

論文審査の結果の要旨

氏名 井柳美紀

本論文は、18世紀フランスの思想家ドゥニ・ディドロの、科学・芸術・政治をまたがって展開された膨大な著作を、多様性という観念に着目することで、一貫した視座の下、読み解こうとしたものである。特に、政治論における初期の啓蒙専制主義から後期の政治的自由と権力制限の擁護への転換において、この観念の果たした役割を探ることを課題とする。

「はじめに」において筆者はまず、18世紀フランスの思想家たちを普遍主義的とし、それとの対抗上、19世紀になってロマン主義者や自由主義者たちによって多様性が価値として発見されたとする通説的な理解を、主にアイザイア・バーリン、アーサー・ラブジョイらの研究をたどることで整理する。このような通説的な理解において、ディドロは、あるいは普遍主義者の一員として、あるいはロマン主義の先駆者として、評価がわかる。筆者によれば、これは、ディドロの思想の中に、明らかに多様性を一つの価値として評価する視点が存在するにもかかわらず、同時に彼が生涯あくまで普遍的な真理を支持し続けたことに由来する。そこで筆者は、ディドロの思想を全体として理解するために、彼が普遍性・合理性・客観性への支持を、同時代の思想家たちと共有し続けたにもかかわらず、その自然観においては大きな変化が見られることに着目する。すなわち、生物学をはじめとする新しい学問動向の刺激を受けつつ、ディドロは、自然を固定的なものとしてではなく、むしろ自ずと変化し多様化していくものとして、理解するようになる。この自然像の変化の結果、芸術の理解においては、単に普遍的なモデルの模倣ではなく、自己変化していく自然の営みに参加することで、新たに美を創造していく人間の能力や個性に注目するようになり、さらにその結果として生まれる、個々人の多様性を前提にした政治のあり方を問うことにもなった。このような視座の下、筆者は、自然・美・政治の観念をめぐって、それぞれについて時系列的にディドロの思想を振り返っていくことで、各領域における彼の思想の変化の中に、並行性と関連性を見出していく。

このような筆者にとって、ディドロについての先行研究は、次のように評価される。ディドロの著作は多様な領域にまたがる上に、生前公刊されなかったものも多く、また著作間での矛盾も少なくないため、その思想的全体像を示すことは困難であった。特に政治思想の分野においては『百科全書』を編集し、その諸項目を執筆した時期と、それ以後エカテリーナ2世に招かれロシアを訪問して以後の時期との間で、大きな変化が見られるため、これを他の諸領域での議論と関連づけつつ、意味づけることには特有の困難がつきまっ

た。このような困難にもかかわらず、ディドロの政治思想の変遷をたどったJ・ブルースト、さらにブルーストを引き継ぎつつ、初期の啓蒙専制政治観から、後期における政治的自由の再評価と革命論へと変遷を意味づけるA・ストラグネルらの研究を、筆者は高く評価する。彼らの研究を踏まえた上で、さらにそれらをL・クロッカーやG・スタンジェらの総合的なディドロ研究の成果と結びつけ、ディドロの政治思想の変化をより根底から再解釈することが、本論文の課題となる。

第1章では、ディドロの自然観が検討される。筆者は、ディドロが自然を、諸部分が相互に連結した一つの大きな全体として構想した点においては生涯変わらなかったとした上で、にもかかわらず、その自然観は、初期の理神論から、感覚論や唯物論的決定論へ、そして同時代の学問の新しい動向から刺激を受ける中で新たな自然認識へと、大きく変化したとする。このような変化は、自然の一部であると同時に自然を認識していく人間の、自由と作為の可能性を模索する過程でもあった。

初期の理神論の時期において、ディドロは、自然と社会とは連続したものであり、自然の一部としての個人は、理性の力によって情念を正しく用いることによって、全体との調和と徳を実現し、幸福になることができると考えた。しかしながら調和を保証する「知的な神」の存在に懐疑的になったディドロは、ロックやコンディヤックの影響の下、生得観念を否定する感覚論へと次第に移行する。ところがディドロは感覚論にとどまることもできなかつた。というのも、感覚論は懐疑主義や相対主義へと転化しうるものであり、ディドロはあくまで普遍的な真理の存在を信じようとしたからである。また彼は、精神と物質の二元論にも満足できなかつた。そこでディドロは、神の存在や、精神と物質の二元論を前提することなく、人間的世界における真理の存在を見出すべく、さらに唯物論へと向かう。しかしながら、その結果行き着いたのは決定論であり、個人の自由の可能性を見出すことができなくなってしまった。

ここにおいてディドロは、自然を機械論的で法則的に捉えるニュートン的な自然観そのものに挑戦することになる。すなわち自然を、時間を越えて妥当する数学的・物理学的法則によって支配された世界と見るのではなく、同時代における生物学、化学、医学、生理学の発展を受け、自然をむしろ、常に変化し無限に多様化する、自己生成的なものとして理解するようになる。言い換えれば、ディドロは、自然の中に変化や時間の次元を見出したのである。この際に重要なのは、ディドロがこの変化を目的論的に捉えず、また多様性を優劣の視点から理解しなかつたことであつた。

それでは、このような新しい自然観において、いかにして人間の自由と創造の可能性を見出しうるのか。人間をあくまで自然と連続的に捉え、心身二元論を取らないディドロは、頭脳を含む人間の身体の自己差異化に注目する。自己生成的でたえず多様化していく自然の一部としての人間は、記憶の能力により自我を形成し、自らの歴史を作り出す。その結果、人間は自然の多様化原理に加わり、そこに新たなものを創造していく。そこに人間の

個性の可能性も生まれる。しかしながら、ディドロにおける個性とは、他者を排除して孤立するものではない。むしろ自然の多様化原理の一部である人間の個性は、他者との理解と共感を求め、他の個性と結びつくことで発展していく。ディドロはその可能性を人間の想像力に見出し、この可能性は芸術論や政治論ともつながっていく。

第2章では、ディドロの美についての議論が、とりあげられる。この領域においても、ディドロの認識は大きな変化を見せる。まず『百科全書』の時期において、ディドロは配列や釣り合い、対象といった、関係の中に美を見出していた。すなわち美とは自然の中に客観的に実在するものであり、人間はこの関係を悟性の力によって発見するとした。美とは虚構ではなく、むしろ自然を忠実に模倣することにある。したがって、想像力による美の創造は認められる余地がなく、美の多様性はむしろ模倣からの逸脱として捉えられた。そのかぎりにおいて、ディドロの美学・芸術観は、きわめてアリストテレス的であり、芸術家の使命は、人々に外在する普遍的な真善美を発見し、それを人々に効果的に示すことにあるとされた。このことは、彼の演劇論、小説論、絵画論において変わらない。

しかしながら、ディドロは次第に、真理を発見することの困難を意識するようになる。例えば言語論において、ディドロは真理を明晰に表現する言語の力を疑うようになり、固定的・分節的な言語による表現を越えた、全体のイメージを想像力によって喚起する詩を評価することになる。そして、人間が理性だけでは到達できない領域があることを認識するようになり、理性の限界を越えてこの領域に触れるためには、想像力、感性といった能力が必要であると考えようになった。このことはさらに、美についての単一概念への疑いにつながる。多様であり常に変化する人間にとって美の尺度は、それぞれの個人によって個別に捉えられるべきであると考えに至ったディドロは、美の「理想的モデル」論を構想した。すなわち、変化する自然を模倣することは困難であり、むしろ芸術は自然の中の一瞬の美を個別的に捉え、これを模倣するのではなく、美の真の「理想的モデル」へと高めていくことにある。芸術家は自然の中に美の「理想的モデル」を捉えることで、自然を越えた創造者になりうるのである。しかしながら、この美の「理想的モデル」とは、プラトンのイデア論とは異なり、人間が自然の多様化原理に創造活動を通じて参加していくことを意味した。

またディドロは、廃墟画への着目により、このような創造能力が芸術家の特権ではなく、鑑賞者もまた創造を経験することができるとした。かつて偉大であった文明が荒廃した風景を描いた廃墟画を前に、人は時間と歴史の意識を覚醒させられ、有為転変を思う。人は「孤独と沈黙」へと導かれ、そこで自己を振り返る。しかしながら、ディドロにとって廃墟画とは、自然を前にした人間の無力を意味するのではない。むしろ、廃墟画を通じて喚起される様々なイメージは、何にも縛られない人間の精神世界の固有性の自覚、さらには、絶えず変化する自然と時の流れを超越した自我意識の形成にへとつながる。ここにおいてディドロは、完全に美の古典的理解を離れ、美の創造を論じるという意味でロマン主義の

先駆となる。

しかしながら、ディドロのロマン主義との異質性は、その晩年、理性の役割を再度強調するようになった点にもうかがえる。ディドロによれば、芸術家が自然の多様化原理に加わって創造を行うとしても、その多様性は無限ではない。芸術家による創造は基準を欠かせず、あくまで自然の全体の調和がなければならない。それゆえ、「理想的モデル」を常に意識するための冷静さ、そのための他者の視線を必要とする。もちろんディドロは、想像力による美の創造を否定したわけではなく、またかつての模倣としての美という理解に戻ったわけでもない。だが、彼が最終的に行き着いたのは、あくまで自然に学び、全体との調和を自覚し、自らの中に「冷静な観察者」を持つ芸術家の姿であった。

第3章では、以上の検討を踏まえた上で、政治と多様性との関わりが論じられる。『百科全書』期において、ディドロは、人間の情念や欲求という個別的な利害と区別される、普遍的な正義の存在を前提に、このような正義を理性によって認識する統治者が、真理を認識しないものを統治するという、いわゆる啓蒙専制主義を支持していた。正義や真理が唯一絶対的なものとして存在する限り、これを実現する理性的権力を分割し、制限する中間権力の存在は認められない。また権力への抵抗も正当化されない。このようなディドロにとって、モンテスキューは評価の対象にならず、むしろ社会の自然的で本質的な秩序法則を認識しそれを実現すべく「合法的専制君主」を支持するフィジオクラット（重農主義者）への共感が顕著であった。

しかしながら、ディドロは次第にこのような啓蒙専制主義に懐疑的になっていく。そのきっかけになったのは、小麦論争や飢饉に際しての、フィジオクラットによる所有権についての抽象的原理的な議論に対しての批判であった。そして、さらに決定的だったのは、エカテリーナ2世に招かれてのロシア訪問の経験であった。ディドロは、この経験を通じて、仮に善良な君主によるものであれ、真理に基づく統治は、人々の自発性や判断力を奪い、自由の感情を害すると考えるようになる。さらに、君主が必ずしも真理を理解するとはかぎらないこと、さらにはそもそも政治における真理を、数学や幾何学とのアナロジーにおいて理解することにも懐疑的になった。その結果、ディドロは中間権力による君主権力の制限を肯定し、善良な君主よりもむしろ、人民の多様な意見の対話に期待を持つに至った。そのような彼は、アメリカ革命を称賛する。ただし彼は革命論者になったわけではない。彼が価値とするのはあくまで秩序であり、アナーキーは彼の最も忌避するところであったからである。

このようなディドロの政治論の変化は、彼の幸福論にも及ぶ。彼は、普遍的な真理と結びついた幸福観を放棄し、むしろ個人によって、幸福の内容は異なりうると考えるようになった。したがって、幸福を普遍的な基準ではかることはできず、むしろ個人にとっての内部の自然にどれだけ忠実であるかという「真正さ」こそが新たな価値となる。このことはさらに文明論に及ぶ。ディドロによれば、人間は自然の多様化原理に加わることに

よって、多様な文明を形成したのであり、文明ごとに異なる幸福の感じ方が存在する。したがって、多様な文明が結びつき普遍的な社会を形成することは望ましいが、そこに強制があってはならず、むしろ自発的な変化こそが、文明化の名に相応しい。自然の多様化過程こそが文明の基礎にあり、人々の多様性を助長しつつ、それを結びつけ一つの全体とするのが文明の働きなのである。このようなディドロの文明社会において重要なのは、相互の必要とコミュニケーションを通じての、関係性の構築であった。人々の多様性と自発性を前提に、人々や諸文明を結びつける紐帯の発展を目指したディドロは、商業を中心に人々間の交流のネットワークの拡大に期待した。

このように、ディドロにとっての多様性とは、普遍的、画一的、静態的な自然観から、自ずと変化し無限に多様化を繰り返す動的な自然観への変化によって見出されたものである。人間はこの自然の多様化過程に加わることで、そこに新たなるものを加えることで創造を行い個性を示す。またこの個性は孤立したものであってはならず、個性はむしろ他者との関係の中でのみ現われる。個性が他の個性と結びつくことで、さらに多様性が増大する。これこそ、ディドロの多様性論の最大の特徴であり、彼の後期の政治論における、人民の政治的自由と権力の制限、文明の多様性の擁護と強制の否定は、そのような彼の多様性観を踏まえてこそ、よりよく理解されるのである。

以上が本論文の要旨である。

本論文の長所としては、次の点を挙げることができる。

第1は、広い諸領域にわたるディドロの膨大なテキストを渉猟し、多様性の観念に注目することで、かなりの程度一貫したディドロ像を描き切ったことである。各領域におけるディドロ研究の蓄積を踏まえつつ、自然・美・政治観における彼の議論の展開の中に、並行性と関連性を見出したのは、本論文の功績と言えるであろう。啓蒙専制主義から政治的自由と権力制限の擁護へというディドロの政治観における変化については、既に先行研究において指摘があったものの、本研究により、啓蒙専制主義とまったく異なる政治論を可能にした背景に、ディドロの多様性についての構想があったことが明らかになった。

第2は、18世紀思想理解への寄与である。18世紀の普遍主義に対し、19世紀における個性と多様性の評価という、19世紀のドイツ・ロマン主義以来の固定観念に対し、18世紀において既に多様性を評価する視点が存在したことを、本論文はあらためて明らかにした。しかも、ディドロにおける多様性の理解は、ロマン主義的理解に収斂しえない独自の性格を持ち、同時代における新しい自然科学や美意識の発展と連動したものであった。したがって、一見したところ普遍主義的に見える18世紀思想の中に、それとは異質な諸要素が含まれていたのであり、18世紀思想そのものの複雑さについて、新たなる理解の必要があることが、示唆された。

第3は、多様性についての、新たな理解である。第一に、多様性とは、自ずと変化し絶

えず多様化する自然によって生み出されるものであり、その意味で、時間と深くかかわるものである。第二に、多様性のために重要なのは関係性であり、個性は他の個性と結びつくことで新たな個性を生み出す。多様性とは、内に閉じ、互いに関係を持たない諸個性によって形成されるのではなく、むしろ関係性こそが多様性を生み出す。このような多様性理解は秩序構想としても重要であり、現代の政治理論にとって示唆的である。

但し、本論文にも短所がないわけではない。

第1は、政治論の分析が必ずしも具体的に展開されていないという嫌いがあることである。ディドロの多様性の評価が、彼の政治論にどのような影響を及ぼしたのか、本論文の分析は抽象的なレベルにとどまっている。ディドロ自身が、詳細な制度論を展開しなかったことにも一因があるが、政治における多様性が具体的にどのような形で現われ、処理されていくのか、もう少し踏み込んだ議論が可能だったのではないか。

第2は、ディドロの議論を位置づけるための比較の視点についてである。本論文は、あえて検討対象をディドロに限定し、わずかに行うのがルソーとの比較である。しかしながら、例えば、本論文が念頭に置いている19世紀ドイツのロマン主義者たちが自らの先駆者として評価したヘルダーとの比較を行えば、ディドロの多様性の意味について、新たな視点が得られたかもしれない。

第3は、「一般意志」や「ダーウィニズム」など、思想史的にきわめて繊細な取り扱いの求められる諸概念について、時として不用意な叙述が見られることである。

しかし、以上の短所も、本論文の意義と価値を大きく損なうものではない。

本論文は、その筆者が自立した研究者としての高度の研究能力を有するものであることはもとより、学界の発展に大きく貢献する、特に優秀な論文であり、博士（法学）の学位を授与するに相応しいと認められる。